

花川病院

一戸 寿予 (看護部 / 看護師)

功 績 一戸は、2025年第33回日本慢性期学会（第13回慢性期リハビリテーション学会）でKOMIチャートシステムを活用した「やりたい」に寄り添うケア～脳血管障害患者の実践を通して～というテーマで発表しました。この症例は、今年度親身な対応のレポートで、ベストレポート賞ともなっていた事例です。今回の学会では、595演題のポスター発表の中で、一戸の演題が日本慢性期リハビリテーション学会の優秀賞、5演題の中の一つに選ばれました。

推薦者氏名 看護部長 三浦 友貴

推薦理由 一戸は2階回復期リハ病棟の看護師として、日々患者さん・ご家族との丁寧なコミュニケーションを大切に、親身な対応を実践しています。今回の事例では、KOMIチャートを活用して患者さんの課題を正確に分析し、チームで優先度を共有することで効果的な介入を実施しました。その結果、排泄・摂食・情緒面の改善がKOMIレーダーチャートでも明確に示され、日本慢性期リハビリ学会において優秀賞を受賞する成果につながりました。患者さん中心の看護を体現した一戸の取り組みは、理事長賞にふさわしい顕著な功績と考え推薦いたします。

内 容

70歳代男性、自営業にて現役で食堂を経営していた方。脳出血後に開頭血腫除去術を施行された氏に対し、一戸は入院時の情報をもとにKOMIレーダーチャートを活用し、課題と残存能力を可視化しました。入院当初、氏は重度の失語症、右麻痺、嚥下障害を有し、経管栄養や尿道カテーテル、オムツ使用が必要な状態であり、前医ではチューブ類の自己抜去により抑制を余儀なくされていました。一戸は、まず安全面を最優先とし、尿道カテーテル抜去を実施。その後の頻回な脱衣やオムツ外し、尿汚染に対しても、氏の行動やサインに着目し、「脱衣や起き上がりはトイレへの意志表示かもしれない」と推測。2人介助でのトイレ誘導を丁寧に繰り返すことで、排泄自立を確立させました。

さらに、咀嚼・嚥下訓練にも積極的に取り組みました。氏は従命が困難でVF検査が実施できず、胃管挿入への抵抗も強かったため、観察とチーム連携を強化しながら直接訓練を実施。自助具の使用も促す中で、後半は手づかみとなってしまふ。ただご本人の食へのこだわり、「食べ物を一粒でも無駄にしない」という気持ちに寄り添い、その思いを尊重することで3食経口摂取へと移行し、食事の満足感とモチベーションを維持しました。

加えて、一戸は患者の精神面や意思疎通困難にも細やかに対応しました。感情失禁や怒りの発露が見られる時間帯や状況を家族からの情報、生活習慣や心理的背景から分析。面会時間の工夫やチームでの統一した対応を徹底することで、氏が穏やかに過ごせる時間を増やすことに成功しました。このように、一戸は患者さんの「やりたい」という気持ちを尊重し、安心感と満足感につながるケアを積み重ねることで、患者さん中心の関わりを実現し、結果それが身体面の大幅な改善へと繋がりました。

そしてこの症例は、KOMIチャートによる可視化と患者さん中心の親身な対応が評価され、日本慢性期リハビリテーション学会において、優秀賞を受賞しました。